
白球、遥か彼方へ

ザード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白球、遙か彼方へ

【Nコード】

N0078B

【作者名】

ザード

【あらすじ】

一人の少年が野球を知った。少年、和歌神夏真は、いずれ高校野球で戦おうと兄と誓った。そして甲子園で兄と戦うため、夏真は東京都の学園に進学した。しかし、その学校には、パンフレット、ホームページで掲載されていたはずの野球部が存在していなかった！夏真はそんな学校に進学してしまった、それでも、彼は諦めずに甲子園を目指そうとする。

第一話 「一塁手 和歌神 夏真」

「どうした、夏真。もうツーストライクだぞ。」

ある河原で小学生くらいの2人の子供がいた。

一人は片手にグローブをし、右手には硬式野球のボールを持っている。

「まだだ!! 一球のこってるだろ、早く投げろよ!!」

そう叫んだのは、右バッターの位置に立ち、片手にバットを持っている少年だった。

彼の名前は和歌神^{わかがみ} 夏真^{かしん}、ピッチャーをしている少年の弟だ。

「よし、いい心意気だ。んじゃ、ラスト一球で三振にしてやるよ!!」

少年は大きく振りかぶり、ボールを投げた。

「うおお!!」

ブーン!!

バットは大きく空を切り、和歌神の後ろにはボールが落ちていた。

「三振、バッターアウト♪」

ピッチャーをしている少年は、そう言いながらグローブを空高く投げた。

「これで今のところ、俺とお前の対戦成績は俺の38戦36勝2敗で29奪三振だな。先に帰るぜ、夏真。」

空から丁度よく落ちてきたグローブをキャッチして、少年は自分の家へと向かっていった。

「……ちくしょう。」

そういつて、和歌神はその場に座り込んだ。

これまで夏真は色んなスポーツをしてきた。バスケ、サッカー、バレー、柔道、剣道、その他色々。

しかし、すでにどれにも和歌神は興味を寄せていなかった。それは、さっきの兄が原因だった。

「野球も駄目なのかな、俺……」

和歌神以上に、兄は色んなスポーツに興味を持っていた。なので、和歌神は色んなスポーツで兄と勝負してきたのだが、野球と同じくろくに勝てることも無く、自分には才能が無いのだ、と思ってしまうのだ。

今回の野球も、いまだにヒットを打てたのはたった2回、しかも勝負の大半は三振で打ち取られてしまっている。

「何言ってるんだよ、夏真。」

落ち込んでいる和歌神の前に、一人の少年がやってきた。

「蓮……」

少年の名は九城 蓮、夏真の同級生で幼馴染だ。

九城も和歌神と同じく野球をやっていてピッチャーをしている。

「もっと練習すればいいだろ？俺も手伝うよ。俺が投げるから、しっかり打てよ。」

九城はそう言ってポケットからボールを取り出すと、和歌神から18mくらい離れた。

和歌神も立ち上がると、バットを構えた。

「よし、いくぞ!!」

「こい!!」

あれから数日後、和歌神とその兄はいつも通り河原で勝負をしていた。

「さうて、今日で記念すべき50戦目だな。」

あれから和歌神は九城と勝負して実力を磨いていたが、まったく兄にはかなわなかった。

「なあ、この50戦目、賭けでもしないか？」

「賭け？」

「そうだ。負けた方が、高校になってから一人暮らしをするんだ。」

「……なんで？」

兄はにやっ、と笑った。

「ガキの一騎打ちじゃねえところで戦おうってことだ。高校野球、その甲子園でだ。」

「……いいぜ、だけど兄貴。」

和歌神はそこまで言って、右バッターの位置に立った。

「一人暮らしは、兄貴がすることになると思うぜ。」

「どっから来るんだよ、その自信は。」

兄はその手にボールを強く握り、構えた。

「行くぜ!!」

とても小学生とは思えないその豪腕から放たれる速球。

小学生が投げれるスピードではなかった。

「うおお!!」

ブォン!!

一球目、ストレートに見事に空振った。

「次、行くぜ!!」

先ほどよりスピードが落ちた。

(これだ!!)

和歌神はボールの少し下にバットを持っていた。

ボールは和歌神の寸前で下へと落ちてきた。二球目はフォークだった

「ドンピシャ!!」

予想はできていた、だからこそ当てれると和歌神は確信していた。しかし、そのボールは予想以上に下へと落ち、バットの下を通った。

「はい、ツーストライクだ。」

夏真はボールを拾い上げ、兄に向かって投げた。

兄はグローブでパシッ、とうまくキャッチし、早くも投げる体制になった。

「さあさあ、ラスト一球だ。前もって言うておくぜ、球はストレイトだ。」

そういつて、兄はこれまでに無いほど大きく振りかぶった。

より投げる際に力をこめられるように、つまり球速をあげるためだ。

「来い!!」

あれから6年後、和歌神は寮のある学校に進学した。つまり、あの戦いで負けてしまったのだ。しかし、悔しさは何も無かった。

「今回は、俺の勝ちだったな。さて、もうこれからは一騎打ちはしないでおこうぜ。今度戦う時は甲子園で、だ。」

あの時、三振を取った和歌神の兄はそういった。

そして和歌神は、再び彼と戦うために、自分の故郷から出て東京のある学園に入学した。

こうして、彼の激しくて熱い高校野球生活が始まった。

第二話 「右翼手 武神 信史」

「ここが俺の通う学園か。」

大きな校舎、なんだか異常なまでににぎわっているような気がする校内、入ってきていきなり目に入った『学園生活 is Freedom!』という意味のわからない文字が刻まれた石、なんだか入る学園を間違えたかのような気分のする雰囲気を漂わす学園だった。

「えっと、俺は1・4か。」

ちよっと変わった感じの雰囲気とは裏腹に、普通に入学式等は終わった。

あくまでここ、蒼月学園にしては、だが。

「校長が「たまには授業もサボりましょう」って言ってたけど、マジなのか？」

そんなことを呟きながら、和歌神はグラウンドを歩き回っていた。もう授業は全て終わったので、野球部を探しているのだ。

しかし……

「どこにあんだよ？」

どれだけ探しても野球部が見当たらなかった。

今日は練習が無いのだろうか、などと考えながら歩き回っていたのだが、これでは埒があかないと思い、和歌神は担任の先生に野球部はどこにあるのかを尋ねた。

すると、返事は予想外言葉だった。

「この学園に野球部は無いよ。」

「……………へ？」

夏真は絶句した。

そして、和歌神はすぐにカバンの中のパンフレットを確認した。

「確かに野球部って、書いてあるよな？」

「ああ、それ？ 多分係りの人が間違えたんだと思うよ。でも野球部

は4年前に廃部になつてることだけは確かだよ。」

それを聞いて、和歌神は数十秒固まった。

しかし、次の瞬間には夏真は全速力で職員室に向かっていた。

「校長先生!!」

入るときに「失礼します」も言わずにものすごい勢いで戸をあけて、校長の下へ走った。

そして校長の机を叩き、大声で叫んだ。

「「なんで野球部を廃部にしたんですか!?!」」

その声は、誰かとハモっていた。

え? と思い、和歌神は横を見ると、1人の青年が自分と同じく校長めがけて叫んでいたのだ。

(気付かなかった……そんなに熱くなってたんだな、俺。)

和歌神は、そんなことを考えていた。

「だから、前にも言ったように、ろくに部活動もせず、結果も出せない部だったから、廃部もやむなしの状況だったんだ。そう何度も4年も前のことをそんな強く聞かないでくれよ。」

一見校長には見えない若そうな先生がその青年にわけを話す。

話の内容を聞く限り、彼はこの内容を何度も校長に聞いていたようだ。

「君も、そういうことだ。わかったかい?」

「え、あ、はい。」

隣の青年の存在に驚いていたので、返事もそんなあいまいな感じの返事しかできなかった。

「まあ、武神君。また野球部を作りたかったら顧問の先生と最低5人の部員を集めてね。それができたら野球部をまた作ることもできるから。」

「はい……」

そう言われて、その青年は職員室から出た。

和歌神を引っ張りながら。

「って、な、なんですか!?!」

「いいからついてきてくれ。」
そのまま青年に引っ張られ、3—5組へと引っ張られていった。

「君も、野球をやりたいんだろう？」

「え、あ、はい。そッスけど……」

3年の教室に連れて行かれたということで、おそらく先輩であると認識して敬語で喋る。

「僕の名前は武神^{たけがみ} 信史^{しんじ}。君と同じく野球をしたいんだけど、この学校には野球部が無くてね……」

困った、という風のため息をつき、グラウンドを見る。

「顧問の先生、部員5人を集めようとは思っただけど、意外と野球やりたいって人がいなくてね。ちゃんとこの学校について調べれば野球部が無いことはすぐわかるらしいんだ。」

とどのつまり、野球をやりたいなんて奴はめったにこの学校には来ないということだ。

例外は、ここにいるまともに学校について調べない夏真と武神くらいらしい。

「でも、とにかく2人に増えてよかったよ。希望は見えてきた!!一緒に頑張ろう!!」

「……はあ。」

こうして、和歌神は、後にこの学校のキャプテンとなる武神たけがみ 信し史んじにであつた。

続く

第三話 「先発投手 九城 蓮」

武神にあった次の日の昼休み、和歌神 夏真は武神と一緒に校内を歩き回っていた。やることは部員探しと顧問探しだ。

「なかなか見つからないッスね。」

「まあ、2年間ずっと探しても見つからなかったわけだからね。」

収穫はまったくなく、昼休みの時間は色々な先生や生徒に話し掛けて回るだけで終わってしまった。

「武神先輩、放課後は探すだけ無駄じゃないッスか？部活にいか、そのまま即行で帰る人しか居ないでしょ？」

「まあ、それもそうだね。それじゃあ、河原にでも行って軽い練習でもするとうか。」

そういつて、校門をくぐって近くの河原へ行くことにした。歩くこと十数分、すぐに河原にはたどり着いた。

「時に和歌神くん、君のポジションはどこだい？」

「俺ッスか？一応ファースト（一塁手）してますよ。結構捕球力には自信があるんで。」

「そうかい、？じゃあ、その捕球力を少し試させてもらうね。」

そういつて、武神は夏真から数十メートルはなれた。距離は大体ライト（右翼手）からファーストくらいの距離だ。

「僕のポジションは外野、そのほぼ全部ができる。だから送球はお手の物なんだ。それなりには狙って放るから、しっかりキャッチしてくれよ。」

右手のグラブに白球をバシッ、バシッ、と何度か叩きつけたあと、武神は大きく振りかぶった。

次の瞬間、白球は猛スピードで和歌神の方へと飛んでいった。

「うおっ!!」

少し油断していた和歌神は、その超速球をとりこぼしてしまった。

「和歌神君、大丈夫かい？」

そう言いながら、武神は小走りで和歌神の元に近寄った。

「……マジかよ。」

そう呟くと、和歌神は左手のミットで転がっていったボールをとった。そしてそのボールを武神に渡した。

「はは、驚いたかい？僕の送球も中々早いだろう？」

その笑顔の裏にはたくさんの努力があるのだろう、と和歌神は思った。

その送球の速さは、おそらく高校生としては完璧の早さだった。まさしくレーザービーム、矢の様な送球だった。

「でも、大丈夫ッスよ。次は確実に取って見せますから。」

武神はさっきの位置に戻ると、先ほどと同じく矢のように鋭い送球を送ってきた。

（もう驚いたりはしない）

その送球は武神があえて悪送球にした球だった。普通通りに球を

待っていたら確実に和歌神のはるか頭上を越えていく予定だった。
しかし……

「そこっ!!」

和歌神は飛び上がり左手のグローブで見事にキャッチして見せた。
投げた武神は、少し啞然としていた。

「けっこう難しい球を投げたつもりだったんだけどな……」

武神は軽く頬を掻きながら苦笑いしていた。和歌神はミットからボールをとると、武神めがけて送球した。その球は、何度かバウンドをして力なく武神のグローブに収まった。

「……なるほど。」

「すみません、ファーストやってるもう一つの理由です。」

申し訳なさそうに和歌神は顔を俯かせた。和歌神の送球は武神と比べても、いや、普通の高校生と比べてもはるかに遅い送球だった。

「まあ、ファーストなら投げる機会もあまりないしね。部ができてからしっかりと投げられるようにはしていかないといけないけどね。」

それから軽いキャッチボールをした後、2人はバッティングセンタ―へと向かった。

「さて、次は攻撃について少し見せてもらえるかい？」

和歌神は200円で30球、125kmの球を放る機械の前へと立った。武神は後ろで腕を組んで微笑みながら和歌神をみている。

「わかりました。30球中20球以上は前にかっ飛ばしてやりますよ。」

「ほう。」

そういつて和歌神はバットを持ち構えた。

その構えは、ただバットを持っただけのような体勢で、足を軽く曲げ、脇をしめて構えるわけでもなくただ緩やかに構えていた。

(ほう、神主打法か……)

普通の人が構えるスクエアスタンス等と違い、自然体のフォームで球が来るのを待つ打法、それが神主打法だ。

「さあ、こい!!」

第一球目、125kmの球が飛び出してきた。

「ちよれえ!!」

「カーン!!」と景気のいい音がした。自然体のフォームから瞬時に構え、そのバットが白球を真芯で捉えた。

「もういっちょ!!」

次に出てきた球も軽々と前へかつ飛ばしていく。

結果、和歌神は30球中22球、内10球近くはツーベースヒット、スリーベースヒットはくだらないと言えるくらいの当りだった。

「どうッスカ、武神先輩？」

「いやあ、正直驚いたよ。それくらいできるんだったら、野球の名門校でも通じたんじゃないのかい？」

正直、和歌神は自分の打率に自信を持っていた。

兄と一騎打ちをしているときは惨敗だったが、バッティングセン

ターでは何度も前にかつ飛ばしていたのだ。

「でも、まだまだ。ホームラン級の辺りは一回も出ていなかったからね。」

「えっ？」

武神は和歌神からバットを借りると、真芯の前へと出てそのバットを構えた。別になんら変わったところのないスクエアスタンスだ。

「手本を見せよう。僕は守備や送球以上に……」

白球が武神の元へと飛んでくる。

「打撃の方が得意なんだよ。」

「カキーン!!」と先ほどの音とはもはや別格の音が鳴り響いた。明らかにホームラン級の激しい打球、その球は武神のバットから放たれたものだった。

その後も何度も景気のいい音を立てて白球をかつ飛ばしていった。結果は30球中23球ヒット、内10球近くがツーベース、スリーベースヒット球のあたり、2、3球はホームラン級の当りだった。

「ふう、いい感じにいったね。でも、もう少し球速は早いほうがよかったな。」

（……武神先輩、なんでもっと野球の強い高校行かなかったんだろ？）

夏真は心の中でそう呟いた。

その後は軽く打っていった後、蒼月学園へと戻っていくことにした。2人とも、家が近くにないので学園の寮に住んでいるのだ。

「キャー!! ひったくりよ!!」

東京にしては静かな夜の静寂を、いきなり大声が台無しにした。

「くそっ、どけ!!」

いきなり後ろからぶつかられた和歌神は反応することができず、そのまま引ったくり犯を行かせてしまった。しかし、それを放置しておく2人ではなかった。

「追いかけるよ、和歌神くん!!」

「了解ッス!!」

走り出した武神の言葉に頷き、和歌神も引ったくり犯を捕まえるために走り出した。

「な、なんだ、あいつら!?!」

2人は高校生とは思えない俊足だった。見る見るうちに引ったくり犯との間はなくなっていく、とうとう追いつきそうになった。

「えっ?」

しかし追いつく寸前、和歌神の顔を横切り、後ろから何かが引ったくり犯めがけて飛んでいった。

「ぐあっ!!」

それを後頭部にぶつけられた引ったくり犯はその場に倒れた。ぶつけられたものは、野球の硬式ボールだった。それは、和歌神の覚えのあるボールだった。

（このボール……まさか!?!）

ぱっ、と和歌神が振り向いた視線の先にいたのは……

「和歌神、久しぶりだな。」

「く、九城!?!」

小学生の頃、まだ東京に来ていない時に一緒にいた夏真の幼馴染の九城 連だった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0078b/>

白球、遥か彼方へ

2010年10月11日10時55分発行